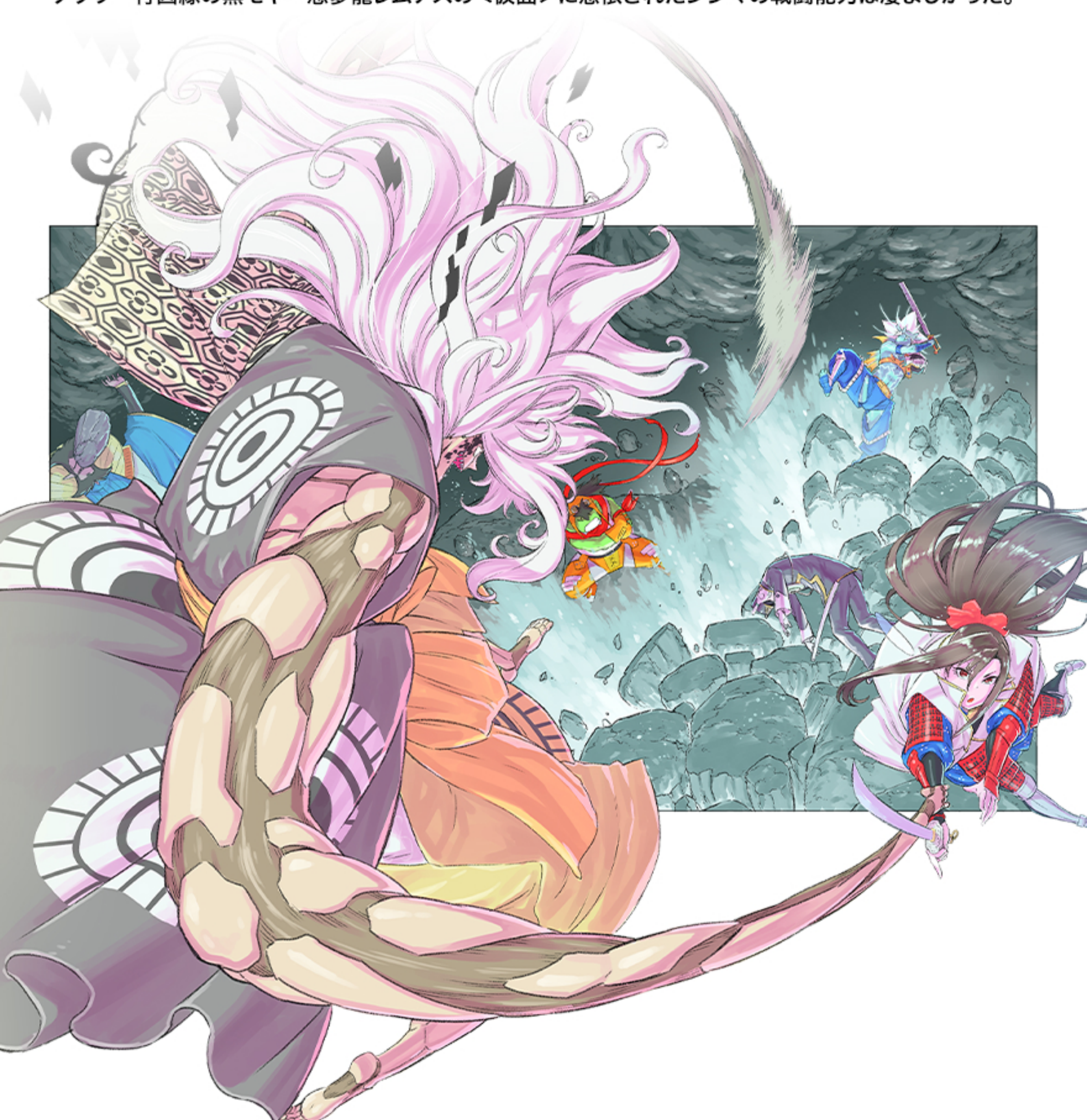


## 5. 奈落

ソウラー一行因縁の黒モヤ…悪夢龍レムナスの<仮面>に憑依されたシジマの戦闘能力は凄まじかった。



あまりのスピードに、かげろうはその刃圏に彼をとらえきれず、JB の剛拳に力任せに殴り勝ち、ダンの援護射撃を正確に予測して躲けて見せた。

経験を積んで成長したという次元ではない。臂力や反射神経など、基礎的なステータスが大幅に上がっていて、本来の剣の技とあいまって全く手が付けられなかった。たった一人でソウラたちと JB 一味の二つのパーティを圧倒していたが、やがて体のあちこちから異音を発し、数か所が炸裂して倒れた。出していた力が駆体の強度の限界を超えていたようだった。

そうすると、今度は近くにいたギラチスやネフェルニシアに憑依して、また凄まじい力で暴れた。その狂乱ぶりに挑発や口車の類も全く聞き入れられず、無茶苦茶に、しかし正確に二組のパーティを追い詰めていくのだった。

かつて他の者がレムナスの憑依を受けた際は、その行動こそ操られたとはいえ、本来の能力が大幅に上がるようなことはなかった。レムナスと献義体には何か特別の適合性があるのではないか・・・？一方的に蹂躪され、脱出もままならない中、ギブの頭にそんな考えがよぎった時、洞窟が崩落した。献義体たちが暴れすぎたのである。ソウラたち冒険者、魔博士に献義体たちまで巻き込んで、土砂とともに奈落の闇に消えていく…。

アズリアが目覚めた時、近くにいたのは少女の姿をしたアビーだけだった。そうだと分かったのは、わずかな明かりがあったからで、それは洞窟の大部分が崩落しながらも、研究所の機能が一部生きていたからであった。

見回すと、近くにはこけしのような人形や、ぬいぐるみが散乱している。奥の方には何やら機械の部品や、生き物の(多分)剥製のようなものも見える。どうやら今いる区画は研究施設というよりは、魔博士たちの私室のようなスペースらしい。



面倒なことになりそうだな…と覚悟しつつアビーの肩をさすると、案の定、マイ・スイートピー!と、ぐるぐる目で抱きついてきた。行動は前と変わらないが、まあ、外見が幼い分愛嬌はあるように見える…それだけだろうか?前にギラチスたちとともに現れた時から、まあ相変わらず変態ではあるのだが、多少当たりが柔らかくなったように感じるというか、多少情を通わせる余地を感じるようになったというか。まあ変態ではあるのだが。

仕方がないので、一時休戦して二人で脱出しようということになった。道すがら、うきうきと上機嫌なアビーに、思い切って聞いてみた。魔博士たちが何を目標としてこんなはた迷惑な研究を行っているのか、ずっと気になっていたのである。

敵味方の間柄で、そんな重要な秘密は喋らないだろうと、あまり期待せずに聞いてみたのだが、アビーはけろりと答えた。曰く、悲しんだり苦しんだり、誰かを裏切ったり裏切られたりする事のない、あるべき形の命を、自分たちの手で生み出したい。ということだった。ピンとこない。

なぜそんなものを生み出したいのかさらに聞くと、今度は散らばる魔博士たちの私物を拾い上げながら、身の上話を始めた。異種族の間に生まれて迫害を受けてきたエストリス。死への恐怖から心を狂わせてきたゾフィーヌ。何か大切なことのために、人倫を侵す研究を行う必要があり、自らの心を改造したブラクウ。そして実子を手にかけて運命を呪ったアビー…

アビーは古代のウェナ諸島に栄えた小国の、貴族の出身だった。幼いころは花を愛でることしか知らない、深窓の令嬢だったらしい。嫁いだのは政略結婚ではあったが、夫は優しく、静かで平穏な日々が続いた。

子供を授かった時、世界が変わるほどの感動を覚えた。自らの命を分け継ぐ無垢なる命を前にして、今まで漫然と眺めていた花の色は全て灰色だったのではないかと思えた。母という生き物の本能の目覚め。至上の宝を得たという確信がその時の彼女にはあった。

しかし、国内の政情が不安定となり、内乱が長く続いた。一つの家の中でも様々に思想や利権が対立し、長じた我が子も革命思想にかぶれ、保守的な実家との関係も悪くなり、嫁ぎ先とも距離を取られ…彼女はそれらを繋ぎとめようと必死に駆け回ったが、時代のうねりの力に翻弄され、幾度も裏切られるうちに、やがて彼女自身にも立場ができ、いつしか政敵を呪うようになっていった。その敵が、その時はたまたま自らの子だった。彼女の命を狙っていたその子を、先んじて毒殺したのである。

内乱によって疲弊していたその国は、ほどなく隣国によってあっさり滅ぼされ、アビーは全てを失った。内乱自体が隣国の仕掛けた工作によるものという噂も流れたが、それはどうでもよかった。

彼女にとって衝撃的だったのは、あの無垢で純粋な魂が、それを至宝と信じて疑わなかった自身の心が、人の世の浅ましさに触れて、醜い暗殺者となり果てたということであった。それからかなり長い間、彼女は植物にしか心を開けないようになった。彼女は人の心そのものを呪った。本当の、あるべき命というものは、このような浅ましさを脱却したものでなくてはならない…

それがどうして、今のようなフランクな性格になっているのだと聞かれると、アビーは、心自体はどうだろうとどうでもよかったから、と答えた。いずれ本当に望ましい形の命を自分が、自分たちが必ず作る。心なんて不完全なシステムとはその時までの付き合いだ。それまではこの浅ましさを楽しむのも悪くないだろうと、今の研究仲間たちと出会って考えられるようになった。

彼女たちの望む完全な命の形のモデルが<龍>である。どこから来たのか、いつから存在しているのかもわからない。それほどに生命体として完結していて、安定している。そして、今不完全で、渴望に溺れる悪夢龍レムナスの<仮面>に必要な体を与え、完全なる<龍>として解き放つことが、彼女たちの今の望みだった。

崩落を免れていた非常口をようやく見つけ出し、地上へと出た時にはもう夕暮れ時になっていた。その頃には他の仲間たちや魔博士たちも、それぞれに地下から脱出してきていた。そこは歴戦の冒険者たち。今回も痛み分けである。



去り際アビーはアズリアの方を振り返って「望みだったけど…」と何か言いかけたが、仲間の魔博士たちのことを少し見返して、また会いましょう♡とにっこり笑って夕日の中に消えていった。アズにはもう、立ち尽くして見送ることしかできなかった。

なんであんな話を自分にしてくれたんだろう、とは後から気になった。